

研究ノート

阿来「魚」を読む

甲 斐 勝 二*

前回本学の工学研究科の大学院生とともに現在中国で盛んになりつつある「生態文学」の様子を紹介しようと厦門大学の王諾教授の「生態文学概論」を翻訳し掲載した¹。もとよりつたない翻訳であったけれども、その折「生態文学」の持つ性格を巡って訳者にあれこれと考えることがあった。この研究ノートでは、その延長として「生態文学」の領域に属すとみなされる作品を一篇取り上げ、実際の作品がどのようなものなのか試みに検討し、ご批判を仰ぎたい。

(一)

ここに取り上げる作品はチベット族の作家阿来の「魚」という短編小説である。この小説を生態文学作品と見なしうることを知ったのは、上海文芸出版社より刊行された『新世紀小説編 2001-2010』²の中の一冊「生態巻」の冒頭に

* 福岡大学人文学部教授

¹ 生態文学：ここで言う生態とは所謂エコロジーの訳語である。「エコロジー文学」というと、日本では「環境文学」と訳されることもあるが、中国では「人間中心主義」（人間の利益を主として世界の存在を考えるもの）の思想に基づくものを「環境文学」とよび、人間を含む生物の生態全体主義を重んじる「生態文学」（所謂ディープエコロジー）とは区分して考える情況もあるので（厦門大学/王諾教授の「生態文学概論」による）、誤解を避けるために「生態文学」をそのまま訳語に使っている。これについては、工学研究科の修士生の徐達然との共訳「王諾『生態文学概論』」を参照のこと（福岡大学人文論叢 48 巻 1 号 H.28）。

² 陳思和主編『新世紀小説編 2001-2010』（上海文芸出版社、2014）

掲載されていたからである。この作品はそもそも『花城』（2000年第6期）に短編小説として掲載されている。

この生態巻の編者王光東氏は上海大学中文系の教授（当時）である。王光東教授の序文では、「生態文学」の特徴を以下のように説明する。

「生態文学」は前世紀60年代に提起されてより、世界的範囲で広い関心を引き起こした。「生態文学」の内容と「生態文学批評」の方法に対してはいまだにそれぞれの視点があるのだが、以下のいくつかの点ではやはりかなりの一致がある。

- (1) 「生態文学」は生態全体主義理論³を基礎とする文学で、そこでは人の生態意識と生態思想が表現されていて、「人間中心主義」を理論の基礎とする文学とは区別されるべきこと。
- (2) 「生態文学」は人と自然との関係を大切に表現しようとするもの。
- (3) 「生態文学」は生態の危機が生み出された社会的な根源と文化的な根源を探るものであること。

新世紀からの「生態小説」の際だった特徴は、作家の生態意識の覚醒である。このような「生態意識」は前世紀八十年代の文学における「生態文学」とは違うものだ。二十世紀八十年代に現れた多くの生態問題を描いた作品は、震え上がるような筆遣いで環境危機が人間にもたらす生存に関わる災難を表現していたが、生態問題を考える基本的な出発点は「人間中心主義理論」を基礎としたものだった。つまり、そこで行われた環境危機に対する思考は「人間」の生存問題を提起するためのものと言うべきであり、「生態全体主義」の基礎の上に立って生態系のバランスと互いの関係とその安定を考えるものではなかったのである。別の言い方をすれば、近年の

³ 生態全体主義理論：ここで言う全体主義とは、政治学にいう全体主義ではなく、総体主義・整体主義などと訳されることもある所謂「ホーリズム」を指すもの。

生態小説というものは生態系の全体的な利益を最高の判断基準とするものなのである。新世紀以来、生態小説は生態の全体的利益を出発点として、我々のこの時代が直面した問題を描こうとしているのである。

この「生態文学」の特徴3点の概括は、前回訳出した王諾の「生態文学概論」と軸をほぼ同じくするので、ここに収められた作品であればその概論を理解する具体的な作品として位置づけることができると考えた。取り上げる「魚」は、短編なので参考資料として拙訳を後ろに載せておく⁴。

(二)

「魚」という短編小説は、従来魚を食べることを禁忌としてきたチベット族の「僕」が、漢族の友人と共にチベット高原での宗教調査の途上、どうやら食料調達というより湿原での遊びのためにチベット族では禁忌に属す魚を釣ることになり、結局は大量の魚を釣り上げてしまう物語である。そこでは、他の文化では趣味にも属す「魚釣り」という行為を通し、現代的で文明化された世界に安心感を得て生きる「僕」とその意識の中にありチベット族の文化伝統を受け継ぐ「自分」との葛藤が語られている。筆者は、伝統的な心情を心の奥底に残しつつも現代文明のもとに生きている現在の「僕」の姿を、「僕」の語りによって幻想的な情景も交えて描いている。以下物語の流れに沿って内容を紹介したい。

物語の始まりは、主人公の「僕」が些細な病気に罹り、休息に加えて消炎剤を飲むことで病気を癒やし、迎えに来た仲間の車を運転するという話から始まる。冒頭の部分を以下にあげよう。

⁴ 翻訳は『花城』（2000年第6期）の初掲作品による。解釈は当時工学研究科での授業における院生の徐達然との検討に基づく。

(3)

三日の間、僕は些細な病のため唐克の町⁵で休んで書き物をし、加えて消炎剤を飲んだので、病は癒えた。三日後、この周辺を回っていた友人たちが、僕を迎えに来て、再び一緒に出発した。車は黄河に沿って西へと疾走する。午前の日差しがバックミラーにキラキラ輝いている。車のエンジン及び車輪が平坦な道を走る振動がハンドルを通して手元に感じられる。元気がまた体に戻って来るようだった。

消炎剤や車のエンジンや車輪の振動が健康を失った「僕」を癒やし元気を取り戻させること、それは「僕」が都市の文明の下に日常を送る様子を暗示する。「僕」は中央民族大学教授の丹珠昂奔⁶から贈られたチベット族の民間禁忌と自然崇拜の論考を携帯しているのです、どうやら大学か研究所の調査隊の一員でまだ青年の研究者のようである。調査隊は「僕」のほかに漢族の人物が二人、チベット族の人物が一人、合わせて四人組で、四輪駆動車に乗りチベット高原の一角を宗教調査のために回る途中のできごととして物語は描かれる。

出発したその日は、気持ちの良い晴天で秋の太陽が照り、昼食を終えて草原に寝転がり休息する作者はその心地よさにうっとりとなる。この部分はチベット高原の自然の中に溶け込む「僕」が細やかに描かれている。

……腹が満ち足りて、山の斜面の乾燥した秋草の上に横になるのは、とても気持ちがよいことだ。さえぎるもののない碧空の奥から、明るく暖かい光が髪、まぶた及び体全体に降りそそいでくる。これは特別な沐浴方法だ。風にゆれる秋草が頬と手をそっとやさしくなで、格別な気持ちよさがある。

⁵ 唐克の町：唐克鎮、甘肅省・青海省・四川省の省境の海拔3400メートルを超える高原にある人口5千人程度の町。ほとんどがチベット族だが、回族・漢族・羌族もわずかにいる。

⁶ 丹珠昂奔は実在の人物、藏族で著名な民族学研究者。1955年に生まれ。1993年に中央民族大学教授。

これらすべてが心身を寝転がる草原の肥沃な土のように柔らかくする。山麓の草原には幾筋もの川が、小さな池を一つ一つとつなぐように縦横に交差して流れている。水面はどこもかしこもきらきらと輝いている。それらすべては陽光の下の僕たちの体同様に柔らかいものに思われた。

わけもなく、僕は川の中でぼんやりしている魚のような気がした。

「川の中でぼんやりしている魚」とは、「僕」が今いる高原の一部として意識されてのことだろう。日差しが「僕」に沐浴をさせる水のようなものとして意識されるなら、その水の中にいる僕は水の中で魚のようなものだと連想するのは不思議ではない。しかし、「魚」はチベット族にとっては不吉なものであり禁忌の対象でもあった。「僕」はチベット族の魚食の禁忌とその理由について語り、更に丹珠昂奔教授から与えられた論文の論述を引く。

この草原では一般に水葬をしていて、水と魚に靈魂を包み込んでいた身体を分解させ消しさらせる、したがって多くのチベット人にとっては、魚は禁忌すべき対象の一つである。今回僕は中央民族大学の丹珠昂奔教授が贈ってくれたゲラ刷りの論文を持ってきた。この原稿は主にチベット民間の禁忌と自然崇拝を論じるものだ。その中では、魚の捕捉と食用の禁忌についての論述もあった。丹珠昂奔教授はこの草稿で次のように指摘していた。邪鬼及び他の汚れを追い払う伝統的な儀式において、チベット人はこれらの目には見えないがあちこちで祟りを起こすものに呪いをかけ、さらに陸地、居住地、心の奥所からそれらを川水の中に追放する。そこで、水中の魚はこれらの不祥なものの宿主になっているというのである。僕は当然ながらこんな邪鬼払いと呪詛の儀式を見たことがあるけれども、それらの儀式と魚の禁忌の間に指摘されるような関係があるなどとは思ってもしなかった。チベット人が魚を釣らないこと及び魚を食べないという伝統は、

概ね相当前から続いていたのだ。

チベット族が魚を食べなかったことを「僕」は知っている。その理由は魚が水葬される人間の体を食べてしまうからだ。「僕」は考えていたようだが、教授の指摘から人間に祟りを及ぼす不祥なものどもがそこに宿るが故だという考え方もある事を知る。チベット族には川の水の中は人のすむ世界ではなく邪鬼の住む世界としてみなされてきた伝統があるというわけである。いずれにせよ、チベット族が以前は釣りや魚食をしないことは一つの生活習慣として伝えられてきたようだ。しかしながら現代ではすでに変化が起っていた。「僕」は自分と魚食との関係をこう述べる。

しかし二十世紀の後半五十年間のうちに、チベットではすでに魚を食べ始めていた。僕も魚を食べるチベット族の一人である。魚の肉は柔らかくておいしいと言われるが、僕の口にはいつも腐敗の味が残るのだ。

ここで指摘される「二十世紀の五十年代より」といえば、人民共和国政府がチベット地区の管理を強化して行く時期である。チベット族の魚食の開始は漢族主体の人民政府による現代文明、具体的には漢文化の導入と関係があるものとしての語りとみたい。だとすれば既に魚を食べ始めているチベット族の「僕」は、すでに漢化の影響の下にある事になる。実際、「僕」は周囲のチベット族から漢化の度合いがかなり進んでいるように思われていた。というのは、休息の後、漢族の二人は獣狩りへ、「僕」は魚釣りをすることになるのだが、「僕」と、一緒に魚釣りの役を担う事になったチベット族の同僚の扎西とのやりとりが以下のように記されているからだ。

「釣りはしたことがあるのか」、扎西が僕に尋ねた。

僕は首を振った。本当は僕も同じ問いを彼にしたかったのだ。扎西は失望の中に怒りの気配を表にした。「君は釣りをしたことがあると思っていたよ。」

もちろん僕はなぜ彼がそんなことを言うのか尋ね返しはしない。なぜならば、同胞の目からすれば、実際には彼らはかなり漢族化しているのだが、僕が彼らよりもっと漢族化していると映っているのを知っているからだ。そう思われるのは、僕が漢語で著述できるからにほかならない。今、僕たちは釣りをしようというのだから、僕が彼より先に釣りをした経験を持っているに違いないと思ったのだ。

「漢語で著述できる」の「著述できる」は研究者の「僕」にとっては「論文が書ける」と訳したほうが好ましいのかも知れないが、いずれにせよそれは日常の口語「漢語」以外に文章世界の「漢語」にも習熟していることを意味し、漢語で記録されてきた漢文化の受容およびそこへ向けての発信力もまたかなり高度なものが予想される。従ってそれほど漢文化を受容しているなら、そこでしばしば話題になる「釣り」という行為も既に経験済みだと思われたわけである。しかしながら、「僕」は、釣りをする人は何度か見たことがあっても、実際には釣りなどしたことはなかったし、釣りも実際は愉快なものとは思っていない。魚を食べるようになったチベット族の一人とはいえ、魚の味をおいしいものだとは感じていないからだ。従って「僕」にはチベット族としての魚の禁忌への心情はまだ失われていないように見える。文脈から見ると、この釣りはどうやら「僕」の選択に基づくようだが、「僕にとって釣りは良い選択ではなかった」「今日の分業はあまり適切なものではない」としきりに反省するのはそのためだ。もう一方のチベット族の友人はどうやらまだその禁忌の伝統の下にいて、魚釣りが怖くてたまらないようだ。「僕」の釣りが初めてだと聞くと「僕」の所から脱兎の如く逃げだし（文中ではチーターが喩えになっている）

獣狩りへと向かった二人の漢族の方にさっさと行ってしまふからである。遠くの丘の上で獣のマーモットを狩ろうと努める友人たちの狩の稚拙さを眺めながら、「僕」は「獵師なみの経験を持つ」と述べているので、彼のチベット族としての経験はかなりのものであることが推測され、心の底にチベット族の文化伝統が継承されていても不思議ではない。

一人で初めての魚釣りに向かう「僕」もまたとても不安である。魚も釣れないに越したことはないと思っているようだ。とりわけ初めてエサのミミズを引きちぎるときには辛くてたまらない。この部分は小さな生命への同情を読み取ることができる部分であるが、「僕」はミミズをエサとして処理する行為を以下のように無理に続けいく。

私がかんざりしたのが釣り針にエサを付けるその時だった。缶詰を開けると、肥えた黒土と緑の野菜の葉の間を、小指ほど太さのミミズがうようよしていた。一本のミミズを半分にしぎるや、粘りけのある液体があふれ出て、赤色や緑色のものが手についてしまった。一つの釣り糸には二つの釣り針がついていた。一つにつけ終わると、僕は近くの草で両手をぬぐい、二つ目の釣り針につけ始めた。二つ目がうまく終わり長い息を吐くと、ひたひたに玉のような汗が滲みでた。

しかし、そんな気持ちも同様の行為の繰り返しで次第に慣れの中に消えて行くことが描かれる。

流れる水がすぐにミミズの形態を消してしまう。まず粘った物質をえぐり流してしまうと、残った白い皮が水にゆらゆらと揺れ動く。やがて、その皮も水に少しずつとけていく。ミミズの姿を作っていた物質はこうして消えてしまうのだ。川に沿って一、二百メートル歩くと、新しいエ

サへと換えなければならなかった。こうやって五、六回つけているうち、僕はもう平気でミミズを引きちぎり、釣り針にかけることができるようになっていた。手元にもはや特別な気持ちは消えていた。

小川の流れの中に投げ入れたエサのミミズは死体であり、それが川の流れによって分解され消えて行くこと、それはチベット族の禁忌を裏付ける現象を語る部分でもあるのだが、そのために起こる餌のつけ直しを繰り返すうちに、「僕」はもう特別な気持ちはなくなっている。もはや不愉快な体液を流したミミズは餌としての道具に過ぎずその消滅も自然の現象にすぎない。

やがて「僕」は「殺される牛が息を引き取る時に喉の奥から発するようなゴボゴボという音」を立てて湿地の地下へと潜り込む渦巻きに巻き込まれていった釣り針によって、予期せぬ魚を釣り当てることになる。

突然手に引きを感じ、ドキッとした。魚が釣り針にかかったのだろうか。川を見ると、釣り針と錘はもう浅瀬にはなかった。水流に引かれて足元の草地に引き込まれたのだ。大きな流れが草地に潜り込もうとして、小さな渦を作っていた。渦の真ん中から殺される牛が息を引き取る時に喉の奥から発するようなゴボゴボという音が聞こえてくる。都市の家屋の下水道もたまにこういう音を立てる時がある。釣り針とそこにかけたエサがその中に吸い込まれていたのだ。僕が釣り竿を引き上げてみると、すぐさま重いものがそこにかかっているという感覚があった。

魚だ。

修行を積んだ密宗のラマ僧たちが教えてくれたことがある。僧たちが密室に閉じ籠もり修行する時、金色に輝いている何かのチベット文字または何かの画像が見えるという。僕は密宗の課程は修めてはいなかったが、魚という文字がすぐさま脳にあらわれた。金色にはいささも輝いてはいな

かったけれども。

魚！その文字は裸鯉のもつ粘ってヌルヌルした深い灰色を帯び、思わずゾツとしてしまった。

かくして、僕は自分が「魚だ！」という喜びというより驚きの声をあげるのを聞くことになったのだ。

魚を釣り上げながら、「思わずゾツとする」ところは「魚」に禁忌を持つチベット族の心情をあらわすところだろう。このあたりから小説は「僕」と「自分」が別れて行き、時には「僕」が「自分」の行為を観察しながら述べるようになる。おそらく「自分」はチベット族の心情の流れにつながる思考を持つ部分で、その「自分」を観察するように語る「僕」は現代社会に生きるものとしての主体に当たるものと思われる。「自分」が「驚きの声を上げた」のは、「僕」が魚を釣り上げるつもりはなく、格好ばかりを決めておけばよいという気持だったからだ。しかしながら、魚を釣り上げ、ようようのことで釣り針をはずや、魚を釣り上げることは望んでいないと明言しながらも、渦巻きの所に戻り、再度釣り針を投げ込み魚釣りを続けて行く。するとまたすぐさま魚がかかる。魚と目を合わせるだけで「背中がゾクツとした」りするのだが、それでも「僕」はかかる魚をかかると釣りを始める。こうやって十数匹を釣り上げたところで、こんな場所でこれほど釣れるその奇妙さにこれはなにかの「陰謀」ではないかと一瞬疑ったのだが、「僕」はその疑いをさっさと消してしまう。なぜなら「もし僕がこのような思いにこだわるようであれば、この人生で魚についての文化の禁忌を打ち破る機会はないだろう」と考えたからである。「陰謀」と言ったのは、どうやら魚釣りの継続はチベット族としての禁忌を打ち破らせようという策略、それを容易になさしめる何かの策略の中に陥ったかと疑ったからだろう。選択したものの気が乗らなかった行為だったが、「僕」は一度魚を釣りあげると、その「行動」を、疑うことを意図的に止めて遂行し続けている

く。文中ではその部分が以下のように述べられる。

草地にバラバラと横たわる魚、および音も気配もしない周囲と時々あわが上がっている沼沢を考えると、たくさんの魚がこのような不思議な場所で堂々と落ち着いて死んでいくのは、なにか陰謀があるに違いない、という思いがしてくる。陰謀！この思いは稲妻のように脳裏をかすめすぎる。実は僕自身がこの考えを頭からかすめ過ぎさせたのだった。もし僕がこのような思いにこだわるようであれば、この人生で魚に関わる文化的禁忌を打ち破る機会はないだろう。

私達が不斷に行動へと入っていくのは、それは立ち止まって考えたくはないということなのだ。

今日の行動とは、エサを小さな淵（今や私はこのしっかりした草地が覆うその下には小さくて深い淵があると信じている）に投げ込み続け、一体どのくらいの阿呆な魚が運命にしたがって惜しみなく死んでいくのか見てやろうというものだ。秋の魚は深い水に沈みこみ、太って怠け者だ。そして、エサも釣り針も全部お腹に飲み込んでしまうほど貪欲だ。そんなことを思いながら、僕は背後の草地にだらしく横になり、死を待つ魚を振り返って見ると、心になんといってよいかわからない恨みと恐怖が生まれてきた。

「僕」の魚を見る目はもはや禁忌を導くような不思議なものではなく、ただ餓えて餌にとびつく貪欲な秋の魚にすぎない。「僕」は禁忌を破るチャンスとして、またこの「阿呆な魚」の上に立つ収穫者として、釣りを続ける事に正当性を与えようとする。しかし、そう考えながらも、その行為をさせ続ける魚たちに対しては「恨み」も持ち始め、魚に対する恐怖も湧いてくる。「僕」が釣り針の数を増やしその行為を一層強く進めようとするのは、その不安に対抗するため

だろう。しかし、どんどん釣りあげられ、野原に静かに横たわり死を待つ魚どもによってその気持ちはどんどん沈んでいく。

……この魚どもはとても深いところから釣り上げられて、微動だにせず草地に横になっていて、まるで命を救える場所、安全な場所がすぐそこにあることなど知らないようだった。魚らは微動だにせずそこに横たわり、わざと死亡者を多く出すことによって殺戮者が自分の行動にどれだけ耐えられるのかという限界を試そうとするかのようなのである。僕の今日の釣りは自分に打ち勝つためのものだ。この世界にあっては、私たちはしばしば様々な扇動をうける。その中の一つは、自分に打ち勝ち、性格の軟弱さに打ち勝ち、知らないことに対する緊張と恥ずかしさに打ち勝ち、文化上と個性上の禁忌に打ち勝て、というものだ。かくして、僕たちは至る所敵なしという所に至れるのだ。今や僕はこの勝利の第一段階を手に入れたのである。

どんどん釣れる魚、しかも釣り上げられてからはもう生きようとももがかない魚に、「僕」はむしろ自分の残虐さの程度が試されているかのような気さえしてくる。しかし、殺戮の行為に堪えて釣りを続ける事、それこそが伝統思想に基づく禁忌に打ち克つことだと「僕」は無理にも信じようとする。なぜなら「僕」が属す「この世界」の「私たち」は禁忌を打ち破ることで「至るところ敵なし」という高みに上れるとされているのだから。「僕」は魚に対して、「死にたがっている」とみなして、死にたいならたいならいくらかでも殺してやるぞ、と言わんばかりの有様で釣り続ける。その一方、「僕」はこれが最後の一匹であってほしいと願っていることは、心中では釣りを望んでいるわけではないことを物語る。しかし、「僕」は釣りをやめようとはしない。やめれば自分が迷信とも言いうる禁忌に負けたことになるからだろう。釣りを止めるため

に遠くの友人を呼び始めるが、友人たちはなかなか来ない。「釣りは止めたい」しかし続けねば「文化上と個性上の禁忌」を打ち破れないという二つの思いに引き裂かれながら、十分に魚を釣りながらも、依然として釣りという行動自体が止められない「僕」に、周囲の雲行きが怪しくなり強風が襲いかかる。「僕」はそこに死神を感じ取り、思わず叫び始める。このあたりは、先に引いた丹珠昂奔教授の悪霊の住処としての川の論述が伏線となっている。その部分は以下のように描かれる。

僕の孤独と恐怖はどんどん高まっていく。

雷が頭の上で響き、ますます強くなる風は髪と服を引き裂こうとし続ける。川の水が吹き上げられた。水滴が次々と顔にぶつかる。叫びをあげようとするのだが、風が口に吹き込んで声を出せない。魚らはつぎつぎとかかり、数はますます増えていく。おかしい！奇怪だ！死神が恐ろしげに笑って本性を現したのだ。僕には、自分が歯を食いしばって、「かかってこい、くそつたれ！かかってこい！」と言うのが聞こえた。

僕には自分が泣き声になって「かかってこい！くそつたれ！俺は怖くないぞ！」と言うのが聞こえた。

僕には自分が「お前らが怖がっていることくらい分かっているんだ。そうだが、俺は怖い。しかし、お前らが怖くないなら姿を現せ」と言うのが聞こえた。

引用する文からわかるようにここでは、「僕」と「自分」が別れていて、強風の中「自分」の叫ぶ声を「僕」は聞き続ける。「自分」の暴走するまま「僕」が発狂寸前の状況に陥ったとき釣りは終わる。その行動を止めたものは、「僕」の意志ではない。エサ切れによる幕切れというものだった。状況によってその「行動」を止めざるを得なかったのである。ほっとした僕は座り込み、釣り竿

は川の水に流されてしまう。雲の沈降と共に訪れる静寂と暗闇のなか、今度は声を立てるはずのない魚の鳴き声が聞こえてくる。

周りは重苦しい黄昏の光景のようだった。僕の友たちも広い草原も周りから消えてしまった。風の音すらも聞こえない。押さえつけられるような暗闇。人をぞっとさせる静けさ。さっき強風で倒れていた秋草がざわざわと起き上がってきた。この時、僕はゲー、ゲー、ゲーという重く沈んだ音を聞いた。ハトの鳴き声に似ている。しかし、僕はこれがハトの鳴き声のはずがなく、それは……きっと魚のはずだと思った。

魚が鳴いているのだ。

魚が鳴くなどこれまで聞いたこともない。

しかし、僕はすぐにこれは魚が鳴いているのだと分かった。ゲー、ゲー、ゲーというとても辛そうな低く沈んだ声だった。ハトの鳴き声ではなく、腐った皮革を踏んだ時に出る動悸をもたらすようなあの音だ。こんな皮革を踏んだ時には、まるで死体を踏んだような気がするに違いない。今や、このまもなく死んで行く魚のすべてが鳴き始めたようだった。魚どもはあの忌まじましい閉じえない目を見開き、渴いて辛い口を大きく開き硝煙のにおいの濃厚な湿った空気を懸命に飲み込んでいる。一口空気を飲み込んで、口を開いて「ゲー」。もう一口空気を飲み込んで、また口を開いて「ゲー」。

魚が散乱している見苦しい草むらの中、こちらで口を開いては「ゲー」、向こうで口を開いては「ゲー」。

このあたりになると、ほとんど幻想の域に達し、その後降ってくる雪やみぞれ混じりの雨によって正常な感覚を取りもどすまで、「雨が降らなければその後どんな状況になっていたのか想像もできない」状態に「僕」は陥っており、ほ

とんど錯乱状態にある。この錯乱状態を招いたのは、魚釣りという行為をめぐるチベット族としての伝統的な禁忌違反への心理と、それを否定しなければ「至る所敵なし」という勝利には届かないという現代「世界」が扇動する思想との葛藤であることは容易に理解できる。物語の中ではこの葛藤に勝ったのはどうやら「世界」的精神に従う側のように見えるのだが、実際にはどちらかはよく分からない。魚を釣り尽くしたわけでもなく、魚釣りを放棄したわけでもない。魚釣り自体は餌切れという所での幕切れでは、実際には「痛み分け」のようにも読める。その後の「僕」の有り様の記述もまた歯切れのよいものではない。

雪や霰が消えて、ただ雨水だけが残されたとき、僕はそのまま地面に身を伏せ、思い切り体中全部を濡らした。同時に、僕は、自分もまたひとしきり思い切り大泣きをしたのだと思った、それは他人には理解されず、自分でも必ずしもはっきりと意識できてはいない方法でだったろう。しかし、それは僕が終に自分に打ち克つたために泣くのか、それとも、自分が自分に打ち克つたために泣くのか、それは今になっても分からない。或いは日頃泣くべきところを泣いていない更に多くの何かのために泣いていたのだろうか。

とあるからである。「僕は、自分もまたひとしきり思い切り泣いたのだと思った、それは他人には理解されず、自分でも必ずしもはっきりと意識できてはいない方法でだったろう」この部分、実は何のことかよくわからないのだけれども、この翻訳の解釈で間違っていなければ、先ほど聞いた魚の鳴き声を「自分」の泣いた方法と「僕」は考えていたのだらうと思われる⁷。だとすれば、小説

⁷ この部分原文では、“同时，我想自己也痛痛快快地以别人无从知晓、连自己也未必清楚意识到的方式痛哭了一场”となっているが、「生態卷」は「痛哭了一场」を「痛哭一场」

の初めの部分で自身を喩えた魚として自分は泣いたことになろう。自分はこうやって魚とともに死ぬことを泣いたのだらう。この歯切れの悪い書き方からは、「僕」や自分が禁忌にこうやって「勝った」のだとしても必ずしも思い通りの勝利と言うわけではなさそうだ。ここでは誰が何のために泣いているかも暗示されているだけで実は明快には記されてもいないのである。

「僕」はこうやってこの危機的状況から脱し、皆と車へと戻ってくる。そして「車内で清潔な服に着替えて、清潔な服のにおいと車が発散するゴムやガソリンのにおいを嗅いだとき、僕には自分がこれで本当に安全になった」とほっとするのである。現代人の移動を支える車の中、そこはチベット族の邪神の入り込む余地はないということである。物語の冒頭、病气から回復した「僕」が車に乗り、「車のエンジン及び車輪が平坦な道を走る振動がハンドルを通して手元に感じられ」ることから「元気がまた体に戻って来るようだった」と書かれていたように、「僕」は既に車に代表される現代文明のなかで生きる人間なのであった。

(三)

この作品を、現代化と潜在化された伝統文化の間に生きるチベット族の現在の心情を描いた心理小説と読んだのが、普布倉決氏である。普布倉決氏は「阿来の心理小説『魚』について」⁸という評論において、「集合的無意識」（集体無意識）の語を使い、チベット族の人々の意識の中に浸透しているチベット族文化伝統の禁忌と、現代化への意識の乖離から生まれるチベット族の人々の複雑さを指摘して、この小説について以下のように述べる。

に作る。初掲版による。

⁸ 普布倉決「浅談阿来的心理小说《鱼》」『西藏文学』2005・6p 92-94

阿来の小説「魚」の中には、チベット伝統文化の禁忌がチベット人に対する、とりわけ現代のチベット人に対する制約がはっきりと見て取れる。阿来が作品中に描写する二種の情緒の対立は、正に子文氏がチベット族の精神に起こっているという二重性の産物である。一方では現代的な生活様式を持ちまたその受容を進めることを望み、その一方脳裏には伝統的な考え方や意識を残している。これを打ち破るには極めて大きな勇気と胆力が必要なのだ⁹。

これを受けて、死に神との闘いの情景を通し以下のように述べる。

……禁忌を破ろうとする足取りの辛さ、禁忌の人間に対する制約の強さは誠に恐ろしいものだ。小説の結末では、収穫の喜びはなく、嵐の後の草むらの上で「私は思いきり別人には理解されず自分でもはっきり意識されない方法でひとしきり慟哭した。」¹⁰ 他の民族から見れば最ものんびりしておもしろい野外の釣りが、心理と意識の危険な体験の場となっている。チベット族の読者であれば、自分もその場にあるように思われ、作者と共に禁忌への最後の頑張りを成し遂げるだろう。

禁忌への視点に対する「作者との最後のがんばりを成し遂げる¹¹」というのは、このチベット族の読者も同様に作者を応援して禁忌を越えて行くということを言うのだろう。したがって、おそらく普布倉決氏は、「魚」という短編を、このような辛い経験を経なければ禁忌を超えて行けないチベット族の人々の複雑

⁹ 上掲書 p93

¹⁰ この部分評論では「我痛痛快快地以别人无从知晓、连自己也未必清楚意识到的方式痛哭了一场」となっていて、初掲の原文とは違いがある。

¹¹ 原文は「与作者共同完成最后一次冲刺」。

な心理を描くものだと考えている。彼が「魚」を「心理小説」と呼んだ理由はここにあるのだろう。

漢族が主流を占める中華人民共和国に編入されたチベットが、現代世界の一隅を支える漢族の文化に浸透されていくこと、つまり漢化を通してチベット族が現代化して行かねばならぬ場合も多々ある事は十分推測される。これは他の少数民族でも同様であって、そこでは各民族文化の継承者の複雑な心情を描く物語が生まれることもまた十分に予想される。チベット族作家阿来の「魚」をその間で葛藤する人間の心理を画いたものという視点から読むことは決して間違いではなからう。しかしながら、この「魚」では、「魚釣り」という行動を通して描かれるのは、チベット族の伝統を過去のものとして越えて行かざるを得ない心情の複雑さであると共に、その自然観の変貌が決して手放しで喜ばれる変貌ではないこともまた描いている点も注意したい。そこから始まるのは、発展至上主義が持つ自然からの無分別な収奪という思想への変貌なのである。

先の引用と重なる所もあるが、この点を確認するためにその部分をもう一度引用しよう。

……草地にバラバラになっている魚、および音も気配もしない周囲と時々あわが上がっている沼沢を考えると、たくさんの魚がこのような不思議な場所でゆったりと落ち着いて死んでいくのは、なにか陰謀があるに違いない、という思いがしてくる。陰謀！この思いは稲妻のように脳裏をかすめ過ぎる。実は僕自身がこの考えを頭からかすめ過ぎさせたのだった。もし僕がこのような思いにこだわるようであれば、この人生で魚についての文化の禁忌を打ち破る機会はないだろう。

私達が行動へと力を注ぎ続けること、それは立ち止まって思考しようとはしないということだ。

引用文中「陰謀」という言葉には、先に指摘したように、自分が不愉快な行為をさせられているという響きがある。それは本来避けるべき禁忌を何ものかに破らされているという意識にほかならない。しかし、「僕」はそこから先には踏み込まず、思考を意図的に停止して魚釣りという行為を続けていく。その行為は遂行自体が目的となり、無抵抗な魚の殺戮をいやいやながらもひたすら続けていく。そして、それがあたかもこの世界で勝利を得て生きて行くため「自分に打ち勝つ」ための正しい選択だと自ら主張し始める。釣り上げる魚、これは実は先ほど草原の上に横たわった自分を重ねたものでもあったのだが。

魚らは微動だにせずそこに横たわり、わざと死亡者を多く出すことによって殺戮者が自分の行動にどれだけ耐えられるのかという限界を試そうとするかのようなのである。僕の今日の釣りは自分に打ち勝つためのものだ。この世界にあっては、私たちはしばしば様々な煽動¹²をうける。その中の一つは、自分に打ち勝ち、性格の軟弱さに打ち勝ち、知らないことに対する緊張と恥ずかしさに打ち勝ち、文化と個性上の禁忌に打ち勝て、というものだ。かくして、僕たちは至る所敵なしという所に至りうるのだ。

文中に持ち出される「この世界」からの煽動、それによって「至る所敵なし」¹³となるとは、現代人のもつ所謂発展主義の思想状況を語るものであろう。「この世界」とは「僕」が生きていこうとしている世界、つまり産業革命から始まる近代文明が作り出した現代文明社会という「世界」を指すものとみたい。その世界は各地区に残る数々の禁忌や制約を、普遍性を特徴とする合理性によって超えて行くことで、抑圧されてきた人間の各種の欲望を解放し、多くの富と

¹² 煽動：原文は「鼓動」、言葉や文書で人の情緒を刺激し、行動を引き起こさせることで、ここでは煽動の意味で解釈した。

¹³ 原文は「我们便能无往而不利了」、「无往而不利」を「至る所敵なし」と訳した。

成功および自由を手に入れてきた世界である。その世界に属す「僕」は、それが勝利の道であると煽動され、行為自体を正当化して先へ先へと進まされる。この状況にあっては、立ち止まって考えてはならないし、考えていては勝利はない。むしろ機械的に与えられた行為をひたすら続けて完遂することこそ奨励されるものとなる。このような考え方は王諾氏によって自然環境の破壊、生態系の均衡喪失を導く原因の一つ「発展至上主義」として批判されたものだった¹⁴。こうやって引き起こされる生態破壊問題をどう描くか、というのが「生態文学」の主題であったはずである。従って、この「魚」と言う短編が現在のチベット族の複雑な心情を描く心理小説であることは認めるとしても、生態文学として読むならば、そのチベット族の一人としての禁忌との闘いという行為は「発展主義」を肯定しそちらへ向かうべき行為として描かれていると言いうる。では、物語ではそれが肯定されているのか。そうとも言えようが、その行為が決して当人が心底から望むものとはなっておらず、悲劇的な選択として描かれていることには注意が必要である。この点を考えると、この「魚」という短編を、チベット族が禁忌を乗り越えて現代化することをあたかも望んでいるように読む普布倉決氏の視点をそのまま認めるわけにはいかない。むしろ「発展主義」へと向かいつつある現在のチベット族青年の心理の複雑さの描写によって、伝統文化や各種の禁忌で守られてきた地域の生態環境と住民との関係の今後の危機、例えば「魚」ばかりではなくチベットに住む珍奇種の生物の収奪、有用動物の大量狩猟、自然破壊それによってもたらされる生態の混乱や破壊等を予想させるもの、或いはそれを導く原因を語るものとして読むべきではなからうか。その危機は、「僕」が最後に「自動車」の中に逃げ込んで、服を着替え、機械の臭いを嗅いでそこでようやく現実世界に戻ったことを確認し

¹⁴ 王諾氏は生態破壊に繋がる近代の思想の一つである「発展至上主義」のイデオロギーの存在を指摘し、本来人間に奉仕すべき発展であったはずのものが、発展の為に人間が奉仕している状況を指摘する。（『生態文学概論』（『生態文学』人民出版社2012）p49）」と指摘する。

て恐怖から解放されるところにも見て取れる。「僕」は既に自動車が代表する¹⁵この世界の人間になっているのである。この小説が「生態文学」として読みうるとすれば、また「生態巻」に収められた理由があるとすれば、まさにここにあると考えている。

このような視点に妥当性があるとすれば、この小説が「生態巻」の中に選録されたのは、先に挙げた編者王光東氏の示す生態文学の3つの特徴のうち（3）の「生態の危機が生み出された社会的な根源と文化的な根源を探る」性格を持つものであったからだと推測される。つまり、この小説はチベットに生態危機をもたらしかねないチベット族の心情の変化とその原因を示したものと読まれたためだろう。だとすれば、「魚」という短編は、釣りという禁忌を破る行為を通して、「発展至上主義」という近代の思想に無理矢理引きずられ、また自らもそれが正しいと無理矢理信じて進むチベット族の人物の自己の分裂を描くことで、チベット族の知識人の心情の現在を描き、チベット族地区の文化、或いはその文化と密接に関わりを持つチベットの自然生態の危機への警告、あるいは既に始まっている危機の原因を描くものだ、とまとめることができよう。釣りが終わって「自分」が泣いたのは、勝った負けたの問題ではなく、このような状況を進まざるを得ない自分に気づいて涙を流したのではないか。それこそが作品に述べる「日頃泣くべきなにか」であったと考える。

最後に注意しておきたいのは、この物語は現代化していく「僕」を描きチベット族の現在の心情を泣いているばかりではない、ということだ。この物語には「魚」とは別のもう一種類の動物が登場する。山野にくらす動物マーモットである。脇役ながらその行為の描かれ方にも注目したい。このマーモットは、草原に休息する「僕」の前に草むらから突然現れ、「僕」の射撃を巧みに躲し

¹⁵ 自動車を近代を代表する、と言うと些か突然かも知れないが、近代社会の一つの結論的な社会である「ユートピア」を描いたハックスリーの『すばらしき新世界』の紀元が大衆車を生産した「フォード」の登場から始まることを思いおこしてほしい。

て逃げてしまうし、他の三人が狩に向かう場面では別のマーモットが三人の狩人を翻弄しているように描かれている。マーモットは脇役として描かれているだけなのだが、このしたたかなマーモットの描写の中に、この地で今後も生き残っていくであろう様々な事象への希望が託されているように読み取れるからである。

参考資料

魚¹⁶阿来¹⁷

三日の間、僕は些細な病のため唐克の町¹⁸で休んで書き物をし、加えて消炎剤を飲んだので、病は癒えた。三日後、この周辺を回っていた友人たちが、僕を迎えに来て、再び一緒に出発した。車は黄河に沿って西へと疾走する。午前の日差しがバックミラーにキラキラ輝いている。車のエンジン及び車輪が平坦な道を走る振動がハンドルを通して手元に感じられる。元気がまた体に戻って来るようだった。一気に四、五十キロを走ると、広く平坦な川岸の草地より道は小さな丘へと登っていた。丘の中腹で僕は車を止めて、本来の運転手に運転を任せる事にした。

皆も車から降り、体を動かしながら、何気なしに目を細めて風景を眺めている。先ほど離れた小さな町が遠い草原の中に埋めこまれていた。距離が遠くなると、本来はないような美しさを感じられた。丘のふもとでは、緩やかな河川が光を照り返していて、少し暖かさそうな感じがする。皆が草地に座ると、周囲の秋草が小さいな音を立て始めた。それは朝の霜が融けるなごりの、最後のわずかな湿気が蒸発する音だった。空気は干し草の香りで満ちていた。

皆がタバコを吸い終わって、立ち上がりお尻についた草屑をはたき落としたとき、毛並みの美しい肉付きのよい大きなお尻が目の前にくねくねとあらわれた。マーモットが一匹川の水を飲み終わり、山の斜面にある乾燥したほら穴に戻ろうとしているところだ。大きく肉付きの良い体をよじりながら坂をのぼっていくと、透き間なくはえている

¹⁶ 「魚」この作品は上海文芸出版社『新世紀小説編 2001-2010』生態巻の冒頭におかれた作品で、『花城』2000年第6期に初掲。翻訳は上掲上海文芸出版社『生態巻』掲載版による。翻訳は工学研究科修士課程2年（当時）徐達然との共訳。

¹⁷ 阿来：1954年四川省出身でチベット族の作家。現在四川省作家協会主席。

¹⁸ 唐克の町：唐克鎮、甘肅省・青海省・四川省の省境の海拔3400メートルを超える高原にある人口5千人程度の町。ほとんどがチベット族だが、回族・漢族・羌族もわずかにいる。

秋草がその体の前で分かれ、また体の後で合わさっていく。僕は車から小銃を持ちだし、その後ろから草むらの最もよじれている部分をねらって撃った。澄んだ銃声が陽光に乗って遠くまで響き、鼻は新鮮で刺激的な火薬のにおいで満たされる。ところがマーモットは姿形もなかった。仕留めた手応えはあった。しかし銃声に跳びあがりその後姿を消したところには、わずかの血痕も残ってはいなかった。

車は丘を走り下り、黄河の兩岸に広がる広大な草地を走り続けていく。昼頃になると、また別の山道を登った。車が再度止まった。今や昼食の時間だった。広い軍隊用の布シートの上に、ビールや牛肉および草原の小さな町の回教徒食堂で買った乾いて硬いパン¹⁹が並んでいる。腹が満ち足りて、山の斜面の乾燥した秋草の上に横になるのは、とても気持ちがよいことだ。さえぎるもののない碧空の奥から、明るく暖かい光が髪、まぶた及び体全体に降りそそいでくる。これは特別な沐浴方法だ。風にゆれる秋草が頬と手をそっとやさしくなで、格別な気持ちよさがある。これらすべてが心身を寝転がっている草原の肥沃な土のように柔らかくする。山麓の草原には幾筋もの川が、小さな池を一つ一つとつなぐように縦横に交差して流れている。水面はどこもかしこもきらきらと輝いている。それらすべては陽光の下の僕たちの体同様に柔らかいものに思われた。

わけもなく、僕は川の中でぼんやりしている魚のような気がした。

この川の中の魚は背中が真っ黒で、腹が浅い黄色だ。この魚は声も発せず、静かな水の中に浮いて、夢の中の影のようだ。これらの魚はうろこがないため、裸鯉と呼ばれている。前世紀の初め、若尔盖草原とほかのいくつかの草原をまとめて松潘草原と呼んでいたので、フルネームは松潘裸鯉というものだった。

僕が横になってあれこれ思いをめぐらしていると、友たちは既に四輪駆動車の後ろを開けて、釣り糸釣り針、釣り餌の準備をしていた。これらの道具は、銃と銃弾同様に草原の旅にとっては必需品だ。僕たちは四人で一組の宗教調査班だったが、草原の奥に車を止めてこれから漁業者と狩猟者になろうというのである。二人は山をさらに上へとの

¹⁹ 「パン」原文は「餅子」、穀物の粉をこねて円盤状に焼いたもの、携帯食にもなるのでここでは「パン」と訳してみた。

ぼって、野ウサギやマーモットなどの獲物を探しに向かった。僕と貢布扎西は魚釣りへと下って行くことになった。

僕にとって釣りは良い選択ではなかった。

この草原では一般に水葬をしていて、水と魚に靈魂を包み込んでいた身体を分解させ消しさらせる、したがって多くのチベット人にとっては、魚は禁忌すべき対象の一つである。今回僕は中央民族大学の丹珠昂奔教授が贈ってくれたゲラ刷りの論文を持ってきた。この原稿は主にチベット民間の禁忌と自然崇拜を論じるものだ。その中では、魚の捕捉と食用の禁忌についての論述もあった。丹珠昂奔教授はこの草稿で次のように指摘していた。邪気及び他の汚れを追い払う伝統的な儀式において、チベット人はこれらの目には見えないがあちこちで祟りを起こすものに呪いをかけ、さらに陸地、居住地、心の奥所からそれらを川水の中に追放する。そこで、水中の魚はこれらの不祥なものの宿主になっているというのである。僕は当然ながらこんな邪気払いと呪詛の儀式を見たことがあるけれども、それらの儀式と魚の禁忌の間に指摘されるような関係があるなどとは思ってもいなかった。チベット人が魚を釣らないこと及び魚を食べないという伝統は、概ね相当前から続いていたのだ。しかし二十世紀の後半五十年間のうちに、チベットではすでに魚を食べ始めていた。僕も魚を食べるチベット族の一人である。魚の肉は柔らかくておいしいと言われるが、僕の口にはいつも腐敗の味が残るのだ。

今日の分業があまり適切なものではないことは確かだった。

魚への禁忌がない漢族の二人は猟銃を選んで、前屈みになって広々とした丘へと登って行き、僕と扎西は河原に下る。足元の草地は不安定なものだった。というのは、広々とした草原は実際は沼池の泥土の上に浮かんでいるからである。天気はよくて見晴らしも良いのだが、足元の不安定と草の下の黒い泥のグショグショという陰気な音で、これから始めようという釣りに恐怖の気配を感じた。

「釣りはしたことがあるのか」、扎西が僕に尋ねた。

僕は首を振った。本当は僕も同じ問いを彼にしたかったのだ。扎西は失望の中に怒りの気配を表にした。「君は釣りをしたことがあると思っていたよ。」

もちろん僕はなぜ彼がそんなことを言うのか尋ね返しはしない。なぜならば、同胞の目からすれば、実際には彼らはかなり漢族化しているのだが、僕が彼らよりもっと漢族化していると映っているのを知っているからだ。そう思われるのは、僕が漢語で著述できるからにはほかならない。今、僕たちは釣りをしようというのだから、僕が彼より先に釣りをした経験を持っているに違いないと思ったのだ。

扎西はもう一回確認した、「本当に釣ったことがないのか。」

僕ははっきりとうなずいた。

扎西は手に提げていた釣りのエサ缶を僕に押し付けて、「じゃ僕は彼らと狩りに行く」と告げるや、この屈強な体の男は草原を飛ぶように走りだした。水溜まりを一つまた一つ、小川を一本また一本と跳び越えて行くその動作は、なんと力強く機敏だろう。こんな姿を見れば、もし必要とあらば、チーターと競走することも可能だと思われる。しかし今は、その力強く機敏な姿で逃げて行くのであった。

一本の小川の前で、僕は立ち止まった。

小川の水は浅く、陽光は透き通った水を通りぬけ川底がゆらゆらとゆれて見える。川の両辺には多くの茶色や白い草の根が水の中で軽やかになびいている。水の流れではなく川底の小さな砂がサラサラと流れて立てる音が響いている。川の幅は広くはなく、最も狭いところでは、ぴよんと飛び超えられるほどだ。したがって、すぐそこにはえていた紅柳の木の一枝を折り、釣り糸をくくりつければそれで釣りができた。

私がかんざりしたのが釣り針にエサを付けるその時だった。缶詰を開けると、肥えた黒土と緑の野菜の葉の間を、小指ほど太さのミミズがうようよしていた。一本のミミズを半分にちぎるや、粘りけのある液体があふれ出て、赤色や緑色のものが手についてしまった。一つの釣り糸には二つの釣り針がついていた。一つにつけ終わると、僕は近くの草で両手をぬぐい、二つ目の釣り針につけ始めた。二つ目がうまく終わり長い息を吐くと、ひたいに玉のような汗が滲みでた。

優雅にいかにも熟練したような姿勢で釣り竿を振り、釣り針を小川に投げた。残念ながら、川が狭すぎた。釣り針とミミズ及び小さな錘は、釣り糸が引く鋭い音と共に川を

越えて対岸の草むらに落ちてしまったのだ。釣り竿を元に戻すと、釣り針のエサが一つなくなっていた。仕方なくもう一本のミミズをちぎり殺し、僕の手や指に広がるミミズの粘りけのある液体を気持ちの悪さにたえながら見る。その液体は黒いみどり色だ、その中に二、三点の赤い血があった。サングラスをかけると、その色にどぎつさはあまり感じなくなった。次に投げた釣り針は川に入った。釣り針は川底の明るい光にゆらゆらと照らされながら、澄んで浅い河底にゆっくり落ちた。その後は砂と一緒に下流へと流れて行く。釣り餌と予備の釣り糸および釣り針をつめた軍用ショルダーバッグをぶら下げ、僕は流れていく餌に沿って、下流へとゆっくり歩いていった。

流れる水がすぐにミミズの形態を消してしまう。まず粘った物質をえぐり流してしまうと、残った白い皮が水にゆらゆらと揺れ動く。やがて、その皮も水に少しずつとけていく。ミミズの姿を作っていた物質はこうして消えてしまうのだった。川に沿って一、二百メートル歩くたびに、新しいエサへと換えなければならなかった。こうやって五、六回つけているうち、僕はもう平気でミミズを引きちぎり、釣り針にかけることができるようになっていた。手元にもはや特別な気持ちは消えていた。その時、遠い丘から数発の澄んだ銃声が伝わってきた。銃声は土に響いてやってきたので、まるで銃弾が身近をかすめて行ったようだ。僕は彼らからかなり遠くにいるけれども、彼らが銃声とともに立ち上がり、前方へと突っ込んで行くのが見えた。釣り針は水に沈んでいき、耳に聞こえてくるのは、細かい砂が川底でサラサラ流れる声と秋草が太陽の光で残っていた水分を失う時の小さな音ばかりになった。川の水が釣り糸を押し流し、その振動が釣り竿から手元に伝わってくる。紅柳の釣り竿を握る手がざらざらしたので、もう一つの手を持ち換えると、その枝の上に残った陽光の暖かみを感じた。三人は丘でばらばらになって、灌木の中を出たり入ったりしている。僕はその様子から先にはなった数発が獲物に命中していなかったことを知った。マーモットは無事に地下の迷宮に戻ったのだ。しばらくすると青白い煙が上り始めた。三人の姿が煙の中をあちこち走り回っている。彼らは結局煙に燻されてしまうことになるだろう。彼らはマーモットの掘った穴の入口から火の煙をその奥に扇ぎ入れようとしているのだった。マーモットが煙に燻されて地下の

迷宮から逃げ出してくることを期待しているのだ。マーモットの地下の宮殿の構造は非常に複雑だ、たとえマーモットがその宮殿に通風口を作り忘れていたとしても、昇っていく煙を少しずつほら穴に扇ぎ入れるのは、非常に時間がかかる仕事である。そのため、専門の猟師は専用の送風機を持っている。しかし、僕の三人の友たちにはそれはない。その結果、彼らは自分で燃やした煙でマーモットよりもひどく燻されてしまうだろう。獣類についてなら、僕は少なくとも猟師なみといえる経験を持っている。

しかし釣りとなると話は別だった。

突然手に引きを感じ、ドキッとした。魚が釣り針にかかったのだろうか。川を見ると、釣り針と錘はもう浅瀬にはなかった。水流に引かれて足元の草地に引き込まれたのだ。大きな流れが草地に潜り込もうとして、小さな渦を作っていた。渦の真ん中から殺される牛が息を引き取る時に喉の奥から発するようなゴボゴボという音が聞こえてくる。都市の家屋の下水道もたまにこういう音を立てる時がある。釣り針とそこにかけたエサがその中に吸い込まれていたのだった。僕が釣り竿を引き上げてみると、すぐさま重いものがそこにかかっているという感覚があった。

魚だ。

修行を積んだ密宗のラマ僧たちが教えてくれたことがある。僧たちが密室に閉じ籠もり修行する時、金色に輝いている何かのチベット文字または何かの画像が見えるという。僕は密宗の課程は修めてはいなかったが、魚という文字がすぐさま脳にあらわれた。金色にはいささも輝いてはいなかったけれども。

魚！その文字は裸鯉のもつ粘ってヌルヌルした深い灰色を帯び、思わずゾツとしてしまった。

かくして、僕は自分が「魚だ！」という喜びというより驚きの声をあげるのを聞くことになったのだ。

かくして、かなりの重さの魚が川から釣り上げられた。魚が空中でびちびちと身を躍らせると、全身がみずみずしく輝いた。生きていた川の水からひき離されたその瞬間に歓喜がもたらされたかのように見える。手を緩め、魚が草地に落ちてしまうと、その体

の輝きは失せてしまい、瞬間に粘りのあるヌルヌルとした本来の灰色に戻ってしまった。あれこれ考えさせられる色にだ。魚に近づくと、正しく腐った死体に近づく感じがした。

これが僕の初めての釣りだった。

魚は水から釣り上げられると、草地に横になって微動だにしない。口から飲み込んだ釣り針を取り出すのはとても恐ろしい過程だった。手に掴もうとしても、その悲しみに溢れた魚の目を正視できるものではない。かくして、上空を仰ぎ見る。空には綿雲があちこちに軽やかに浮かんでいた。空に浮かぶ雲を見ながら、魚の体を手に掴むと、今度は滑って落ちた。魚がもがいているからなのか、それともあの怪しい滑らかさで自分の手から滑り落ちたのか僕には分からなかった。魚はそこに横になって、口はつらそうに開いたり閉じたりとしている。口元に血泡がわき出て、その目に現れていたあきらめもありまた恨めしそうでもある気配はだんだんと暗くなっていった。落としてしまったので、僕は魚を草むらからもう一度手に掴むことになった。今後はかなり力を入れて掴んだため、手のひらを硬いひでで切ってしまった。僕が魚の喉の奥から釣り針をちぎる時、魚の薄い血と私のどろりとした血が混じった。

僕は人が草原で釣りをしているのを見たことがあるので、次にどうすれば良いのかは分かっている。それは、一本の細くてしなやかなヤナギの枝を折り、魚のえらに通し、口から引きだすのだ。このやり方で釣り上がった魚を一本ずつつらねると、持ち運びや携帯に非常に便利だ。とはいえ、僕は自分が草原で釣りをすることを望んだばかりで、多くの魚を釣り上げることを望んでいたわけではない。だからこそ、私は無意識にこの浅くて澄みきっている川を選んだのだ。すぐ近くには本流である大きな川が波をキラキラ輝かせて流れているではないか。

この浅い溪流で僕が気を抜いている間にたまたま魚が釣れてしまったことが問題なのだ。僕は誓う、たとえ潜在意識のなかですら魚を釣り上げることを望んでいなかったのだ。

餌をつけて、小川へと向い、先ほどの魚を釣り上げた場所に行ってみると、確かに何

も異常なところはない。小さな渦が一つぐるぐると回っていて、その渦が殺される牛が死ぬ前に出すゴボゴボという飲み込み音を響かせ、足元の草地の下に消えている。脚をぐいと踏みつけると、草地は何回か揺れて、また強靱な穏やかさに戻った。かくして、僕はエサをその小さな渦に正確に投げ入れた。エサは何度かぐるぐる回って草地の下にもぐりこんでいった。

餌が目の前で消えるや、手にまたもや感電したような痺れがつたわり、釣り竿をもう少しで草地に落すところだった。釣り竿をすぐさま引き上げたのは純粹に本能的なものだった。小川にバシッと水しぶきが上がった。もう一匹の魚が空に重そうに飛んでいる。魚が僕の頭の上をかすめて行った時、お腹の黄疸患者のような土色の黄色が太陽の輝きをうけて、一瞬の間まばゆい金色になった。そのとき僕は自分の口から出た声は悲鳴なのかそれとも歓呼であったのか分からない。今回は、空を飛んでいる魚の釣り針がはずれ、すぐその草地にドンと落ちてしまった。僕が行って見ると、魚は横たわって微動だにせず、盛り上がっている両目がこちらをじっと見つめている。僕は背中がすこしゾクツとした。

また小川にもどり、さっきの場所から釣り針をもう一度投げ入れると、すぐさま魚が針にかかった。

こうやって僕はその渦の下のある場所から一気に十数匹の魚を釣り上げた。それぞれの魚は同じ年の若人のように、大きさや長さがほぼ同じだった。草地にバラバラと横たわる魚、および音も気配もしない周囲と時々あわが上がっている沼沢を考えると、たくさんの魚がこのような不思議な場所で堂々と落ち着いて死んでいくのは、なにが陰謀があるに違いない、という思いがしてくる。陰謀！この思いは稲妻のように脳裏をかすめすぎる。実は僕自身がこの考えを頭からかすめ過ぎさせたのだった。もし僕がこのような思いにこだわるようであれば、この人生で魚に関わる文化的禁忌を打ち破る機会はないだろう。

私達が不斷に行動へと入っていくのは、それは立ち止まって考えたくはないということなのだ。

今日の行動とは、エサを小さな淵（今や私はこのしっかりした草草が覆うその下には小さくて深い淵があると信じている）に投げ込み続け、一体どのくらいの阿呆な魚が運命にしたがって惜しみなく死んでいくのか見てやろうというものだ。秋の魚は深い水に沈みこみ、太って怠け者だ。そして、エサも釣り針も全部お腹に飲み込んでしまうほど貪欲だ。そんなことを思いながら、僕は背後の草地にだらしく横になり、死を待つ魚を振り返って見ると、心になんといつてよいかわからない恨みと恐怖が生まれてきた。

僕はなぜか分からないがもう一つの釣り針を釣り糸に縛りつけた。エサをつけた後、三つの釣り針は水にゆっくりと沈み、またあの渦にまでゆっくりと漂って行き、その本当にあるのかどうかは分からない淵の中へと徐々に吸い込まれていく。僕は口を大きく開けて呼吸することで自分を落ち着かせた。同時に想像していたのは、エサが徐々に底なしの淵に落ちていき、一匹の魚前に落ちていくのだが、その魚は微動だにせず、エサはちょっと失望して、また真っ暗な深い場所へと落ち続けていくという情景だった。そんな沈降を想像していると、僕の体もフワフワと軽くなってきたがその周囲の暗闇のほうは恐ろしいものだった。僕が釣り竿を引き上げようとする、一匹の魚がエサに威勢良くとびついた。なぜエサにこんなに激しくとびついたのか僕には分からない。死自体へと飛びつくとしてもこんな大きな力は不要だろう。魚はエサとエサが包む釣り針を呑み込むと、まったく身動きせず静かになった。僕は待ち続ける。二匹目の魚が針にかかったが、その後またじっとしている。もがいて死から逃れようという様子はまったくない。

三つ目の釣り針はまだ飲み込まれていない。

魚が釣り針にかかったかどうかは手元の感覚で知るしかないのだから、僕はずっと遠い丘でマーモットを燻して空しくさわいでいる三人をぼんやりと眺めていた。丘の煙はもう薄くなった。彼らは無駄な努力は諦めたようだ。車につんできた軍事用のシャベルを用いて地下道を掘り始めた。これはもっと大変な仕事になる。なぜならば、マーモットのほら穴は地下1メートルくらい、そのうえ曲がりくねって続いて、少なくとも百メートルや二百メートルはあるからだ。

愚鈍に見えるマーモットはとても聡明なのだけれども、ここにいる機敏で敏感にみえる魚がエサに対してこんな不思議な態度をとるとは。さあ、三つ目の釣り針にまた一匹の魚がとびついた。魚を引き上げようとする、魚三匹の重さで釣り竿も大きくしなる。三匹の魚がともに水面から離れるや、一緒にもがき始めたので、釣り竿が危なく水に落ちそうになった。魚どものこの努力が川に戻るためだということはわかっても、僕は当然ゆるさない。そこで、一声上げて、力づくで釣り竿を引き上げると、三匹の魚はドシンと足元の草地に落ちた。

僕は魚が草地に落ちるやすぐにもがなくなってしまうことに気づいた。

僕は魚に、この獲得の対象となるすべてに尋常ならざる注意をしていた。それは尋常の注意ではなく、尋常ならざる注意だ。尋常ならざる敏感さをもつ尋常ならざる注意なのだ。決して存在しないものに対してさえ尋常ならざる敏感さで注意を続けていた。

今、僕は魚は草地に落ちるやすぐにもがなくなってしまうことに気づいた。魚の中には川からすぐのところにおいて、背中をぐっと曲げて体をピンと伸ばすという魚なら得意な跳ね上がりをちょっとするだけで、秋の川に戻るものもあったのに、である。草原が金色になる時、流れる水は日々に冷たくなり、渡り鳥の大群も一群一群と離れていく。魚たちは潜水艦のようにとても深いところに沈んでいく、その場所は暗いが暖かい。いまにも冬になろうとするとき、明るいほうを選ぶことは氷結を選ぶことに同じだった。しかしながら、この魚どもはとても深いところから釣り上げられて、微動だにせず草地に横になっていて、まるで命を救える場所、安全な場所がすぐそこにあることなど知らないようだった。魚らは微動だにせずそこに横たわり、わざと死亡者を多く出すことによって殺戮者が自分の行動にどれだけ耐えられるのかという限界を試そうとするかのようである。僕の今日の釣りは自分に打ち勝つためのものだ。この世界にあっては、私たちはしばしば様々な扇動をうける。その中の一つは、自分に打ち勝ち、性格の軟弱さに打ち勝ち、知らないことに対しての緊張と恥ずかしさに打ち勝ち、文化上と個性上の禁忌に打ち勝て、というものだ。かくして、僕たちは至る所敵なしという所に至れるのだ。今や僕はこの勝利の第一段階を手に入れたのである。友人たちにもこの勝利を知らせて

やりたくなった。かくして、両手をあげて振りながら、彼らに向かって大きな声で叫びはじめた。

彼らは辛い穴掘りを止め、腰を真っ直ぐに伸ばして、僕の方を眺めた。僕は片手に一匹の魚を掴み振りまわして呼んだ。2キロくらい離れているので、彼らには僕の手の中の魚は見えないだろうが、魚の煌めきなら見えるはずだ。魚の表面にあるヌメヌメしたものが頭上にある太陽の下で確かにキラキラと輝いているはずだった。彼らは丘の上に立ってこちらを眺めている。彼らの背後、西の空には、山の峰のような雨雲が現れていた。真ん中は真っ黒で、稲光がびかびか光っている。雲のまわりは光でまぶしい金色に縁取られていた。雷音をとどろかせながら、その黒雲は東へ向かって来る。水面を風が吹き過ぎる。直立していた秋草は腰をゆっくりと曲げる。垂れ下がった釣り糸も風に吹かれて、綺麗な曲線に煽られた。

魚がまた針にかかった。

僕はこれが最後の一匹になることをひそかに望んでいた。

しかし、またもや一匹魚がかかった。僕は相変わらずこれが最後の一匹になることを望んでいたのだが、その一方でたくさんの魚が秘密の場所にかたまっていて、まさに死にきていることも分かっていた。はたして三匹目の魚がかかった。

三匹の魚を引き上げる時、やはり水から上げられた瞬間だけは象徴的にもがいた。その後は他の魚と同様に静かに草地に横になっている。なんとも多くの瀬死の魚が私の周りに横たわっていることか。日差しはまことに明るく、風はそれほど強くないのに私の背筋は寒々として行く。

僕はもう一度友達を呼んだ。彼らに早く入れ物を持ってこさせ、たくさんの魚を詰めさせようとしたのである。僕は心底この川岸から離れたかった。この狭い川にこれ程大きな魚がこれ程多くいるはずがないではないか。魚が針にかかる間隔は次第に短くなるようだ。かくして、魚を引き上げる度に、彼達を呼んだのだった。

黒い雲がいつ頭の上で崩れるのかわからない。この時の僕は、餌をつけたり、針を水に入れたり、魚を釣り上げたりがすべて機械的な動きになっていた。なぜならば、僕が

魚を釣りたいのではなく、多くの魚が列を作って死を待っているからなのである。この世界に生を望まぬ人がたくさんいることは以前から知ってはいたが、死を望む魚がこんなに多いとは思ひもしなかった。これらの魚の表情をみると、ある邪教の信者が本当は自分が死にたいのに、その命を奪わせる殺人の罪を他の人になすりつけようとしているかのようだった。

心の中の恨みが増し続ける。

頭上はムクムクと湧き上がる黒雲に覆われ、澄んでいた水面はたちどころに灰色になった。この時の僕は、きつと凶悪な表情をして餌を前の小さな渦に残虐に投げ入れていたに違いない。流れる水が黒雲のように真っ黒になると、渦はまるで地獄の入口ようだった。魚は相変わらずいさぎよく死に赴いてくる。

友人等の歩みはゆっくりだ。彼らは沼沢の中で極めて念入りに路を探している。それは、足元を泥に吸い込まれると何人でも致命的な災難を被ることになるという伝説を信じているためではない。実の所は、この地に生まれその後都市に入った者たちにとっては、臭くて粘る泥できれいな靴を汚したくはなかったのである。

僕の孤独と恐怖はどんどん高まっていく。

雷が頭の上で響き、ますます強くなる風は髪と服を引き裂こうとし続ける。川の水が吹き上げられた。水滴が次々と顔にぶつかる。叫びをあげようとするのだが、風が口に吹き込んで声を出せない。魚らはつぎつぎとかかり、数はますます増えていく。おかしい！奇っ怪だ！死神が恐ろしげに笑って本性を現したのだ。僕には自分が歯を食いしばって、「かかってこい、くそつたれ！かかってこい！」と言うのが聞こえた。

僕には自分が泣き声になって「かかってこい！くそつたれ！俺は怖くないぞ！」と言うのが聞こえた。

僕には自分が「お前らが怖がっていることくらい分かっているんだ。そうだ、俺は怖い。しかし、お前らが怖くないなら姿を現せ」と言うのが聞こえた。

今にも僕が発狂してしまいそうな時、淵の中の魚ではなく、ブリキの缶に詰められていた餌がついになくなった。僕がへなへたと座り、手をゆるめるや、短い釣り竿は川の

中を流れて行ってしまった。自分が大声で泣き出したかどうかはわからない。なぜなら、頭上で光った雷がすべての音に覆い被さってしまったからだ。雷の鳴る中、頭上にあつた空のてっぺんに届くほどの高い雲の山が崩れて来くる。雷鳴が止んだ、稲妻も止んだ。周りは重苦しい黄昏の光景のようだった。僕の友たちも広い草原も周りから消えてしまった。風の音すらも聞こえない。押さえつけられるような暗闇。人をぞっとさせる静けさ。さっき強風で倒れていた秋草がざわざわと起き上がってきた。この時、僕はゲー、ゲー、ゲーという重く沈んだ音を聞いた。ハトの鳴き声に似ている。しかし、僕はこれがハトの鳴き声のはずがなく、それは……きっと魚のはずだと思った。

魚が鳴いているのだ。

魚が鳴けるなどこれまで聞いたこともない。

しかし、僕はすぐにこれは魚が鳴いているのだと分かった。ゲー、ゲー、ゲーというとても辛そうな低く沈んだ声だった。ハトの鳴き声ではなく、腐った皮革を踏んだ時に出る動悸をもたらすようなあの音だ。こんな皮革を踏んだ時には、まるで死体を踏んだような気がするに違いない。今や、このまもなく死んで行く魚のすべてが鳴き始めたようだった。魚どもはあの忌まましい閉じえない目を見開き、渴いて辛い口を大きく開き硝煙のにおいの濃厚な湿った空気を懸命に飲み込んでいる。一口空気を飲み込んで、口を開いて「ゲー」。もう一口空気を飲み込んで、また口を開いて「ゲー」。

魚が散乱している見苦しい草むらの中、こちらで口を開いては「ゲー」、向こうで口を開いては「ゲー」。

僕にはもし雨が降って来なければその後どんな状況になっていたのか想像もできない。僕は草地に座りこみじっとしていた。黒雲の空は非常に低くなっている。立ち上がれば、身は天上に届き、渦巻いてやまない黒雲の中で蛇のようにくねくねした電流に触れてしまいそうだった。またもや雷が一つ体が跳ね上るように大地を揺らして大きく響くと、その後、黒雲は水を詰めていた皮袋の口を開いたようになり、雪や霰を挟んだ雨水が頭に打ち付けるよう降ってきたのだ。次々に与えられるそのはっきりした痛みで私は正常な感覚を取り戻したのだった。

雪や霰が消えて、ただ雨水だけが残されたとき、僕はそのまま地面に身を伏せ、思い切り体中全部を濡らした。同時に、僕は、自分もまたひとしきり思い切り大泣きをしたのだと思った、それは他人には理解されず、自分でも必ずしもはっきりと意識できてはいない方法でだったろう。しかし、それは僕が終に自分に打ち克つために泣くのか、それとも、自分が自分に打ち克つために泣くのか、それは今になっても分からない。或いは日頃泣くべきところを泣いていない更に多くの何かのために泣いていたのだろうか。

黒雲はさっさと巨大なエネルギーと豊かな水分をたずさえて、西風に押されて、東に向かって行ってしまった。太陽はまたもや目の前の世界すべての物の上を照らしはじめた。凍えた体も徐々に温かくなってきた。

三人の友たちがようやくやってきた。

彼らは柳行李を担ぎ、あちこちで魚を拾ったが、なんと行李まるまる一杯となり二人で担いでもかなり重いくらいになった。友人らにあの草地の下に隠れている淵に続くちいさな渦巻きを指し示したとき、彼らはそんなに多くの魚がそこにいるとはまったく信じなかった。車内で清潔な服に着替えて、清潔な服のおいと車が発散するゴムやガソリンのおいを嗅いだとき、僕には自分がこれで本当に安全になったと思われた。車が動きだしてから、僕は振り返り釣りをしていた場所を望み見た。たくさんの川の流が草原のあちこちに漲り、太陽の日差しの下でキラキラと輝いていて、もはやいったいどこであんな不思議なできごとが起きたのか分からなくなっていた。かくして、まだその事件が起きた現場から立ち去らぬうちに、この事件自身が幻の出来事になってしまったのである。